

ども、それでも、さうした平生の心とは違つて、今は心から可哀いさうに堪へられませんでした。それで、自分の考へでは、すぐ来たと思へるやうな、或ることを、ふと思ひついたのであります。

そこで、彼れは、直ぐリースさんの後を追ひかけて、彼の女を呼び戻しました。そして、言ひました。

「ね、丁度今、おれは非常にうまい考へを思ひついたので！　ね、リースさん！　お前どつかに娼になつて行つたらどうだ？　さうすりあ、直ぐお前、それで療治するだけのお金が出来ちまふじやないか？」

「だつて、それじゃ、可哀いさうに、坊やはどうするつもり？」

「なるほど、その子だね！　そりあ、お前のおふくろに頼むわけに行かんか？」

「私のお母さんに？　だつて、お母さんだつて、お金がないわ！　外で働かなけりあ、活計が立たないんですもの！　お母さんに私の子供を預けたら、それこそ一月もたないうちに殺しまふわ！」

「それじゃ、殺してもらつたら、いゝじやないか？」

「子供を？　まあ！　あきれた！」

「いや、子供殺しのことへやつてさ！　なにをぐづぐづ考へてるのさ？　だつて、今はどうしてお金を儲けるかつてことの相談じやないか？　お金つてものは、なかなか、さうたやすく、儲けられるもんじやないぞ！　さうしてゐるうちに、また、子供が生れつちまふぜ！」

と、二人は話を交はしました。

さすがのリースさんも、士官の話には、ぎよつと身の毛がよだつ思ひをしましたが、そして、かねがね牧師さんから聞いた話とは、すつかり違つてゐると思ひましたが、それでも、せつばつまつた場合には、いたし方がありません、それで、先づ一番條件のよい家の娼にならうと、心をきめたのであります。

世間に立つて暮らして行く上には、並みはづれたこともやらねばなりません、ところが、丁度その時、フアンタール夫人が女の子を産みましたが、乳が細いので、赤ちやんを育てることが出来ませんでした、それで、是非とも娼を雇はなければならぬのであります。

フンケンタール家では、もとより、リースさんのことなどは少しも承知していませんでした。そこで、早速、姪に雇はれたいとの申し込みがありましたから、これまた早速、採用することにしたのであります。

その翌日、リースさんはフンケンタール家に参りました。夫人は花柳病患者とは知らずに、リースさんに、我が子を引き渡しました。本當に母親らしいやさしい心から、それではどうかよろしく育て、くれと、いろいろ注意などを與へたのであります。

然し、フンケンタール夫人は、決して我が子を預けばなしにはしていません、絶えず姪のリースさんと、我が子のそばに居つて、子供の養育に就いて、まことに行きとどいた用意を怠りませんでした。

かやうにして、萬事は滞りなく進行しました。たゞ、女の子の唇と鼻のところに、どうしたところか、吹き出ものが目に付くやうに出て居りましたことが、不審の種子となりました。

いかにも、これは不審であり、不吉ではありましたが、その不審、不吉も、夫人の母性愛のため、かき消されてしまいました。少くとも日に三度は、夫人は我が子を、リースさんの手から

受け取つては、いろいろとあやしたり、キスしたり、我が唇で吸つてやつたりしました。

こんな風に我が子の愛にほだされるうちに、フンケンタール夫人は、お産のために弱つた力も恢復し、夫人の身體は、今ではすっかり整つて参りました。たゞ、頸の淋巴腺が、少しはれたのが、一つ變つた點なのであります。けれども、夫人はお産の床に長く就いてゐたせいだと思つて、もうそんなことは、ちよつとも氣に止めませんでした。

フンケンタール主人は、最愛の妻が産後の恢復を見たので、再び抱擁を交はすことが出来たのを、大層嬉しく思ひました。そして、實際にも、心やさしき抱擁を交はしました。これは心から我が妻を愛する夫としては、當然のことでありませう。

かくして、いく週間、夫婦はいとも楽しき快樂に耽けりました。若し、夫人の淋巴腺のはれが一層大きくならず、また、夫の鼻の下に、しつき吹き出ものが現はれさへしなかつたら、夫婦のかうした樂しみは、尙ほさらこまやかで、尙ほも打ち續くことであつたでありませうに！

夫婦は現に身體の局部に起つた此の變調を拒むことは出来ませんでした。それで二人は、いづれどが大黃を服用しました。けれども痛みは更にひどくなるばかりでありました。そこで、二人は

グートマン博士に診察してもらふことに相談したのであります。

グートマン先生は、血液を淨め、且つ、その悪臭を驅除するために、いろんな藥を與へました、けれども、すべては無駄でありました。

そこで、グートマン先生は大變心配して、その後いつであつたか、見舞つて來た時に、彼れはがっかりした面持ちで、

「ね、御主人！ 奥さん！ お二方！ 失禮ながらお許し下さい！ あなた方は花柳病だと思ひますが！」

と、さも恐る恐る、かう言つたのであります。

二人は、むろん苦々しいことに思ひました、そして、グートマン博士に向つて、そんな不調法なことをおつしやるとは、一體なにごとですと言つて、食つてかゝりました、けれども、博士は自説を採つて動きませんでした、そして、

「若しお二方が私の言ふことを信じなさらんければ、外のお醫者の診察を、お受けなすつてごらん下さい、いづれにせよ、明日また伺ひます！」

と言ひ置いて、出て行かうとしたところへ、姥のリースさんが、はいつて來ました、むろん、子供を抱いて居りましたが、その子供を一目見ると、口と鼻のところに、吹き出ものが出來てるではありませんか！

そこで、博士は遠慮會釋もなく、リースさんをとつつかまへて、いろいろと問ひたゞしました、リースさんの顔色はさつと變りました、それで一切が讀めたのであります、萬事はリースさんの胸に秘められてあつたのであります。そこで、博士は一間と鋭く尋ね、彼の女に一切を白状させました。もちろん、リースさんは、忽ち解雇されました、然し彼の女の與へた紀念物は、長くフンケンタール家に遺されたのであります。

その後、夫婦はひどい治療を受けなければなりませんでしたが、それから、女の子も治療に依つて、次第に恢復するやうになりました。けれども、成長しなければならなかつた筈の幾月間に於て、女の子が飲んだ乳は有毒でありましたし、尤も長い間の治療で、その毒は驅除されたとはいふものの、やつぱり、一生病弱で打ち過ぎたのも、無理はなかつたのであります。

此の出來事あつて以來、フンケンタール夫人は姥といふものに對して、非常な反感を懷くやう

になりました、それで、次のお産の時には、むろん、自分の乳は吸はせませんでした、その代り、山羊を一疋買ひ込んで、その乳で育てたのでありました。

けれども、その爲めに、夫人は姉さんといふ人から、お目玉を頂戴しました、といふのは、山羊の乳で子供を育てるにしても、姥の乳で育てるにしても、今日の進んだやり方で、きまつてるやうに、どんな分量を、どの位づゝ、どう飲ますべきかといふことに就いて、夫人は皆目分かりませんでしたからであります。

*

*

*

*

*

フランダール夫人は、常に言ふところに従へば、自分は一生、子供のお守りをするよりは、もつと偉らいことを爲すべき天職を持つて生れて来たものだと思つて居つたのであります。

そこで、夫人は一子ユリウスさんを生み落とすと、早速乳離れをさせ、そして、氣向きものの夫の許可を得て、一人の姥をかゝへることにしました。

夫人から見ると、毎日子供に乳を含ませるといふことは、實に婦人としては下らぬ仕事に外ならぬものであります、それで、夫人は、我が子の養育は、初めて雇つた、歳とつたサピネさん

に、一切を任せただけであります。

さて、此の老サピネさんは心だての善い女でありましたが、何にせよ、少々歳とつて居つたので、身體も弱くなつて居りましたし、それに、痛風症で、脊骨が大變痛むといふことであります。それでも、自分が出来るだけのことは、ユリウスさんのために、いろいろと盡したのであります。

毎日、彼の女は四遍づゝ、ユリウスさんに食べものを與へました、そして、いかに可愛くてたまらんといふ風に見えました、それで、物を食べさせようとするにも、先づ自分の口で嚙んで、いくどもいくども入れたり出したりし、そして唾液で解かし、時には大變骨折つて、唾液を出しては、それで交ぜこなして與へるのであります。

さて、その結果はよかつたでせうか？

ところが、意外にも、かうした可愛がり方は、少しもサピネさんの豫期した結果を擧げなかつたのです。小さいユリウスさんも、少しも太りませんでした、そして、蒼ざめては來るし、手足が痛い痛いと言つては泣いたのであります。すると、サピネさんは、早速線香をともし、魔術を

使つては治さうとしたのであります、けれども、フランダー夫人は、

「そりあ、きつと乳が強すぎたせいでよ！」

と言ひ張つて、とうとう、乳ばなれをさせました。

けれども、すべては駄目でした、ユリウスさんは十二歳になりましたが、まるで老人のやうな格好でありました。

さすがに、フランダー夫人も、これを見ては泣かないわけには行きませんでした、そして、夫に向つて、いろんな愚痴をこぼした末に、かう言ひました、

「ね、あなま、ごらんないよ！ 姥まかせにしてゐたら、此の子は、まあ、こんなじゃありませんか！ これからは、私、自分の乳を含ませるやうにするわ！ そして、一生二度とこんなことはしないやうにするわね！」

これを聞いてゐた姥の老サビネさんは、くやしさに堪へず、とうとう、自分も泣き出して、

「おや、おや、可哀いさうにね！ ユリウスさん！ 姥は、ほんとに實のやうに、お前さんを大

事にして上げたのにね！ まあ、どうしたといふのでせう！ 姥は口で含んでは、お前さんに、食べさせて上げたのにね！ おい、ほんとに此の姥は悲しくて悲しくて、どうしていきやら、分からなくなつたのよ！ 姥は、何んにも間違つたことは、しなかつたんだが、おい、それだのにねえ！……」

と、言ひました。

三六 いかにすれば子供は立派な片輪者になるか

子供に胸衣を着させよ

ガントルム夫人は天女のやうな女の子を生みました、それで、誰れ言ふとなく、お嬢さんは美の典型だといふ評判になりました。肉つきのよい丸顔、生き生きした澄んだ兩眼、溢れるやうな血色、広い胸、蠟燭のやうな真直な骨格、一つとして非の打ちやうがなく、外の子供らと比べる

と、一段と水際立つて優美に見えるのでありました。

お父さんのゲントルムさんは、熱情のある筋骨逞ましき貴公子でありまして、誰れしも一見したところで、直ぐ彼れの血管には、今尙ほ騎士の血が流れてゐることに氣づくのでありました、彼れは生れた女の子を心から喜んでゐました、そして、キスをしたり、抱き上げたり、歌を聞かせたり、一緒に飛びまはつたり、それはそれは一ト通りの可愛がりやうではありませんでした、父さんは、我が子に、屢々かう言ふのでありました、

「ね！ルイゼさん、お前は此のゲントルム家の家名を再興するんですね！」

ところが、こんな美の典型とも稱せられたルイゼさんに對して、お母さんのゲントルム夫人は、なかなか文句が多かつたのであります。先づ第一に、ルイゼさんのつやつやした血色が、夫人には一向氣に入りませんでした。それで、夫人はよく、

「それは百姓娘のやうに見えますわ！」

などと言つたものでした。

然し、夫人が殊に氣に入らなかつた點は、ルイゼさんの腰つきでありました、夫人に言はせますと、

「お前さんの腰はあんまり、むつくりしてますよ！」

そこで、夫が聯隊に召集されて出征したのを、善い機会に、早速、夫人は、神さまが、お間違ひなすつた、ルイゼさんの身體のそここの點に手入れをしようと、いろいろ苦心したのであります、とり分け、夫人は格好な胸衣を持つて來て、ルイゼさんに、それを見てゐる前で必ず着けさせるやうにしました。

さあ、胸衣を着けさせられると思ふと、ルイゼさんは、いつも泣き出しました、いよいよそれを着けてゐると、痛くてたまらんと言つては、しよつちう、こぼしてばかり居るのでした、そして、お母さんに、どうぞ直ぐ取つて下さいと言つては、お願いするのでありました。

あゝ、夫人の如き分別のある奥さんが、たとひ自分の好き好みからだと言つても、それを、まだ考への浅い子供に強ひるなどは、いかに不思議でたまらないではありませんか！

いかにすれば子供は立派な片輪者になるか

三七六

けれども、ゲントルム夫人は、いつかな、我が子の願ひなどを聞き入れようとはしませんでした、却つて、さう言ふ我が子の我が儘を、押しくぢかうとするのでありました、そして、胸衣のために起る如何なる苦しみを、辛棒強くこらへさせようとするのでありました。

それで、毎朝、胸衣を着けさせられる時には、しかたなく、ルイゼさんは、じつと我慢して居りました、腹部の内臓が締めつけられて、もとの位置を離れ、胸のくほみのところに宿換えをしさうでありましたが、それでも、ルイゼさんは、こらへて居りました。肋骨が押し詰められ、肩がぎゅつと高く押しやられるやうでも、やつぱり辛棒してゐなければなりませんでした。

呼吸するにも窮屈であり、また、ものを食べるにも自由を缺いて居りましたが、それも、同様我慢しました、ところが、とうとう、お母さんの考へに従つて、胸衣を着けたまゝで寝よといふ、恐ろしい命令を受けなければならぬやうになりました。そこで、我がルイゼさんも、あまりのいまいましさに、堪へかねて、

「ほんとに、うちのお母さんたら、ありあしないわ！ 自分こそ、さうして見たらどうでせう？」などと、心に思ふのでありました、然し、もとより口へ出しては、言へませんでした。

さて、数年の後、ゲルトルム夫人は、神さまがルイゼさんをお造りになつた總べての點が、すつかり一變してしまつたのを見て、大層満足を感じたのであります。ルイゼさんの生き生きした血色は、今日では、もう再び見ることが出来なくなりました、そして、それは蒼白に變つてしまひました、そして、肩と臀部とは外の娘よりも高くなりました、蠟燭のやうに眞直な脊骨のことでしたから、尙ほさら一段と高く見えるのであります。こんなつまらぬことをするのに、ゲントルム夫人は、支柱だの、白粉だの、いろんな細いものを使つて造り換えたのであります、そして、百姓娘のやうだと言つて、笑つてゐた顔の赤味や、むつくとしてゐた腰などを、すつかり造り換えてしまつたことを、非常に喜んだのであります。

さて、ゲントルムさんは、長い間の征途から凱旋して來ました、彼れは、家に残して行つた娘のルイゼさんを、抱き上げてやりたいといふ心に燃え立つて居りました、そこで、邸宅が眼にはいると、直ぐ馬に一ト鞭與へて疾走して來ました、そして、門をはいると、そこに、彼れは顔色蒼白、體格畸形なる一少女を見出したのです。

彼れは、せきこんで、その少女に向つて、

いかにすれば子供は立派な片輪者になるか

三七八

「お嬢さん、ルイゼさんは在宅でせうね？」

と尋ねました、ところが、意外、意外！ その少女は、

「あたしが、さうなのよ！」

と答へました、

「え？ お前がルイゼ？ 私の娘の？」

「おや、あなた、あたしのお父さん？」

父子相共にいぶかしさに堪へませんでした、久しぶりの再會でありましたから、先づ娘のルイゼさんが、お父さんに向つて手をさし伸べました、すると、お父さんのгентルムさんは馬から下りて、我が子を抱きしめました、そして、二人は相擁して共に涙にかきくれたのであります、娘の涙は喜びの涙、そして、父の涙は悲しみの涙でありました。しかも、父の悲しみの涙は、ああ、然し、知る人ぞ知るであります。

гентルムさんは、とうとう怒り悲しみに堪へず、

「お前のお母さんは、どこに居る！」

と、さも他人のことを言ふやうに、我が子に尋ねるのであります、

「うちに居ります」

と、ルイゼさんは答へるや否や、お父さんを、お母さんの部屋に案内したのであります。

お母さんは我が夫の絶えて久しき姿を見ると、すぐ両手を擴げて、駆けつけ、

「おやつ！ 旦那さま！」

と叫びました。

ところが、夫は冷然として、妻の好意を斥けて、勦聲一番、

「ひどい奴だな！ お前は、どうして、私のルイゼを、こんなことにしたんだ？ うちを出た時には、天使のやうに美しかつたものが、どうだ、今はまるで片輪じやないか？」

と、言ひました。

夫人は、それに對して、いろ／＼と辯解を申し立てました、けれども、そんなことは、怒れる夫の耳には、はいらうともしませんでした、そして、夫は苦が虫をかみ潰したやうに、ソファに腰を下ろして、何か食べものを命するのであります。

いかにすれば子供は立派な疇形になるか

三八〇

その夜は、久方ぶりの再會、しかも名譽ある凱旋の初夜であつたにもかゝはらず、夫は殆んど口をききませんでした。そして、疲れてゐたので、早速寢室に入りました。翌朝、彼れはまだ妻が起きないうちに、さつさと馬に乗り、別れの言葉も告げずに、また聯隊に戻つて行きました。そして、二度と我が家の門をくぐることをしませんでした。

その後、デントルムさんは、娘のルイゼさんに、ルイゼさんの薄志弱行に就いて、長々と手紙を書き送つたことがあります。それを見ると、彼の女は悲しみ、且つ、くやしくてたまりませんでした。そして、

「ほんとに、みんなお母さんのお蔭なんだわ！　そして、あの胸衣のお蔭で！………」と、言ひました。

* * * * *

蟹の小本終

コンラード・キーフエル

(我子の美德)

一 はしがき

私どもキーフル家は別に人に誇るほどの身分もあり、財産もあるといふわけではありません、
そして、地位や、財産や、土地や、名譽などを欲しいとも思いません。たゞ私の小さい誇りとす
るところは、私の子供であります。此の子供が、私のたゞ一つの喜びであります。地位や財産な
どは、これから見れば、私には、ほんの言ふに足らぬ喜びにしか過ぎないのであります。私の子
供は、いかにも身體が丈夫で、正直で、器用で、働らき好きで、その上、心から愛らしいのであ
ります。子供や、私ども夫婦が一生懸命に働らくので、私とはとにかく暮らして行けるだけの財産
は持つて居ります。子供の話が出ると、近所の人たちは、いつも私どもの子供を褒めちぎるので
あります。そして、あんなに善く仕上げたのは、お金があるからだなどと言ふのであります。そ

れを聞くたびに、私は妻と二人で、心から笑はずにはゐられません。なにも我が子を育てるのに、大してお金がかつたわけではありません、いくらお金が無くても、子供を立派な若者に仕上げる事が出来るものですから。

私の長男はコンラードといふのです、コンラードのことは、誰れでも褒めるのですが、それもお金のないと言ふに至つては、やつぱり笑はずには居られません。

今、私は我が子コンラードを如何にして教育したかといふことを申上げようと思ひますが、若しこれをお読み下されたならば、善き教育といふものは、決してお金があるから出来るものではない、それは立派なお金持でも持つて居らない、なにか別な原因から生れるものであるといふことが、お分かりになるだらうと思ひます。それで、善い教育といふものは、決して貧富といふことには関係がないといふことを、篤とお考へになるやうに希望したいと思ひます。

二 私どもの結婚

コンラードの躰け方、生ひ立ちをお話し申上げる順序として、私ども夫婦の結婚の來歴からお

話したいさねばなりません。一體、私の考へでは、子供といふものは、もちろん野菜ではありませんが、然し、多くの點に於て、野菜と似てゐるものやうに思はれます、と申しますのは、先づ私どもが立派な野菜を造らうとするには、種子と培養とを詮議しなければなりません、種子の善いのを吟味することは、誰れしも御承知のことでありませうが、培養も、それと同じやうに注意しなければなりません、いかに善い種子でも、育て方が悪ければ立派な野菜は出来ません、さればと言つて、育て方にいくら骨折つて見ても、種子が悪ければ、これまた、結果の善かるべき筈がありますまい。子供を育てるのも、やつぱり、こつといふものは、これと同じいのであります。それで、立派な子供に躰け上げるには、どうしても種子が善くなくてはいけません、それと同時にまた、立派な育て方が是非とも必要なのであります。種子と育て方とは、兩々相待つて進まなくてはなりません。

幸ひにも、私の両親といふのは、揃ひも揃つて身體が丈夫でありました、そして、私も親同様、まことに丈夫に生れついたのであります。それに親たちは、絶えず私の健康といふことを考へて居られたやうであります。父親といふのは、飽くまでも私の心を信じて呉れたので、私も小さい

時から、どんなことでも、父親に包み隠さずに話したものでした。それほど私の方でも父親になつたのでありました。私も小さな時には、學校などで、随分いたづらをやつたり、友だちをいぢめたりしたものでしたが、それでも、そんなことは一切隠し立てせずに父親に打ちあけたものでした。それで、私は大きくなつてからも、決して虚言を言つたりした覚えはありません。そして、父親は、私の言つたことに對して、一々善悪を判断しては、私にいろいろと教へ諭して呉れたものでした。殊に大きくなつてから、私は父親から女のことには氣をつけなければならぬぞと、よく言つて聞かされたものでした。それで、私はそのために身を持ちくづすやうなことはなく、先づ無事に二十四といふ歳になつたのであります。

忘れもしません、丁度その年でした、私の父はもう五十歳の時でしたが、その年の父の誕生のお祝ひの時でした、父が私を連れて家の裏手の木立のところに参りました、そして、椎の木の下で二人は腰を下ろしたのであります。その時、父は不意に私に向つて、

「ね、わしは此の椎の木が一番好きなんだがね！」

と、言ふのであります。私は餘りの不意な言葉に、しばし何と答へてよいか分からなかつたの

です、

「え？ なせです？ 私にはなんのことが分かりませんが！」

と、言ふより外はありませんでした。

「無理もない！ では話して聞かさう、お父さんがお前のお母さんと縁を結んだのが、そもそも

此の木の下であつたんだよ！」

と、父はさも、若き日の思ひ出に、心燃え立つやうに見えたのでした。

然し、父が私を突然、椎の木の下に連れて來たのは、決して自分の思ひ出の楽しみに耽けらうとしたではありませんでした、それには深い用意と教訓とがあつてのことでありました。果せるかな、父は、

「そこでね、わしは少しお前に聞いて見たいことがあるんだがね！ わしも今年で丁度五十歳だが、死ぬ前に孫の顔が見たいものだよ！ でね、お前、結婚する氣があるかえ？」

と、私に向つて尋ねるのであります。

私もさすがに若い時分のこととて、日頃の父親とは知りながらも、これには少々参らないわけ

には行きませんでした、それでも、

「気がないわけじゃありません！」

と答へました。

「では、お前、誰れか意中の娘でもあるだらうな？」

「私にですか？」

「さうよ、お前にさ！」

「娘がですか？」

「さうだとも、娘がよ、何も顔をあからめるには及ばんよ！ なんほお父さんの前だとして、さう堅くなるには當らんよ！ ね、お前、意中の娘があるだらう？」

「はい、あります！」

「どこの娘だえ？」

「あの、マリーさんといふんです、校長先生とこの娘なんです！」

「あ、あの子か？ あれなら至極結構だ！ あの子は身體も丈夫だし、賢しくもあるし、器用だ

し、正直だしな！ でも、お前ほんとに愛してゐるんだらうね？」

「さうですとも、お父さん、どんな日でも、私はあの人のことを考へないことはありません、もう私には外の女などは眼につきませんです！」

「さうか？ それなら尙ほ結構だ！ 立派な子を生むには、親だちが心から相愛してゐなければならんものだよ！ それはいいとして、女の方では、お前を愛してゐるのか？」

「それは私、さう信じます！ いつも顔を見合はせるたびに、なつかしさうに話しますから！」

「では善は急げだ！ 今日校長先生と、そのマリーさんをお招待することにしたら？」

「さうお願ひ出来れば、此の上なします！」

と、その時の私の心は、たゞ父親の有りがたさに涙こぼるゝばかりでありました。

父は早速、學校へ駆けつけて、校長先生と娘のマリーさんとお呼びして呉れたのでありました。招待の席上で、私とマリーさんの結婚談が持ち上がり、親だちの間では、話はすんすん進んでゐたのでありました。尤も私は席を中坐して、マリーさんと連れ立つて、例の椎の木の下に散歩することを忘れてませんでした、そして、二人は初めて心と心とを打ち開け、結婚の約束を堅

く交はしたのであります。そして、めでたく二人の結婚は成立することになりました。結婚式は極めて質素に挙げられました、そして、結婚後三月立つて、妻のマリーは妊娠し、月満ちて、安々と男の子を生んだのであります。これが、お話の主人公となるべきコンラードなのであります。

三 幼時の育て方

コンラードを儲けたことは、私ども夫婦の喜びはもちろんのこと、私の父も母も大變喜びました、父は初孫を見たいと言つて、私に結婚を勧めたぐらゐりましたし、母は母で、なにかれと世話をやくのであります。けれども、私にせよ、私の妻にせよ、初めての子のことでしたから、どう育てたらよいか、躰けはどうしてよいものか、皆目わかりませんでした。いよいよ命名式も済んでから、或る日のこと、私の弟が、お祝かたがた私の家に見えました、弟はなかなか意見のある男でしたから、一つ子供の育て方を聞いて見ようと思つて、

「ね、どうしたらよいもんだらう？」

と、口を向けると、

「さやう！ なにはさて置き、先づかうと思ふ自分の理想に従つて育てるが一番だらうね！ ところが、いろいろ意見が衝突して結着がつきさうもないやうな場合は、世間の人がする反對をやるやうにした方がよい、したら決して間違ひつこはありませんよ！」

弟の此の勧告は、私にとつては、まるで寢耳に水でした、最初の中は、なかなか腑に落ちなかつたのであります。ところが、だんだん育て、見てゐるうちに、此の言が、少しも奇異でないばかりか、躰けの真相を穿つた名言であるといふことが分かりました。例へば、赤兒には厚い頭巾をかぶせて置かなければならぬとか、暖かく着物で包んで置かなければならぬとか、冷たい風に當らせてはならぬとか、いろんな注意をするのが、一般の女がすることではありますが、私は、それではいかんと言ふので、弟の忠告通り、斷然その反對のことをいたしたのであります。また、妻が赤兒の足が冷えるといふので、何束も何束も靴下を取りかえては穿かせるのであります。これも私には非常に不服でありましたから、或る日のこと、妻に向つて、そんな下らんことはや

めろと嚴命を下したのです。妻は私の命令を容易に用ひようとはしなかつたが、やかましく言つて、とうとう、私の意見通りにしてしまひました。これなども、やつぱり世間の人のしきたりの反對をやつた一例です。

生れて八週間目のことでした、コンラードは床の中で、いつもよりはひどく泣き叫んだことがありました。妻は別に氣にもかけないやうに、赤兒のところへ行かなかつたので、私は妻が子供の身體のことがばかり注意して、子供の精神上のことは一切かまはん、それではいかんと、さう心に思つて、早速、赤兒のそばに行つて、

「コンラードちゃん！」

と、心のこもつた聲で、一言呼びかけたのです、なんで、そんなことを口ずさんだか、私自身にも分かりませんでした。僅か八週間目の赤兒に、私の言つた言葉が分からう筈はありません、けれども不思議に、コンラードは泣き止めて、につこり笑ひ聲をしたのであります。コンラードは父親の慈愛の音調に、俄かに機嫌をとり直したものに相違ありません、私の精神教育の發端は、實に此の愛の音調でありました。

その後、妻は赤兒が泣く毎に、がらがらを鳴らしては泣き鎮めさせようとするのでした、けれども、それは赤兒にとつて、却つてうるさいものだと思つて一向きいめがありませんでした。すると、私はいつもの通り、愛のこもつた「コンラードちゃん！」を發し、それから抱き上げては、節おもしろき歌を歌つて聞かせるやうにしました。そして、これが何よりの泣き鎮め策でありました。

私はその頃、よく村の人から、貴方は大變子供の躰け方がうまい、それには何か秘傳秘法があるかと尋ねられたものでしたが、神ならぬ私に、何の秘傳も秘法もある筈はありません、たゞ私は心からの愛情を子供に注ぎ、子供の心持ちに綿密な注意を拂つてゐるのに過ぎないと言つては、答へたものでした、また、全くその通りなんです、すると、却つて子供の方で、適切な教育法を親に教へるものですよ、「負ふた子に道を教へられる」と言ふことがあります、穿つた言葉ですよ、子供がいやだといふことをしたら、却つて泣き叫ぶばかりです、子供が興味を持つたものを見せては、それについて色々話しをしてやるといふと、むろん赤兒のことですから、私の言ふ言葉は分かりませんが、その言葉の裏にこもつてゐる親の情愛といふものは、さすがに子

供の心に通ずると見えますよ、それで、子供が好きなもの、子供の注意を惹くものは、早速それを子供に見せたり、聞かせたりするのです、つまり子供に従ふんですよ、子供は親の教師なんです。馬小屋へ行つては馬を見せ、牛小屋へ行つては牛を見せる、鶏小屋へ行つては鶏を見せる、庭に出ては蝶々でも、とんほでも、蛙でも、何んでも子供は機敏に注意の眼を向けるものです、これがどのぐらゐる子供の五官、それを通じて子供の精神を發育させることでせう。これが私の教育の筆法に外ありません。

それに、私の教育法については、あのお寺の坊さんが、私の顧問なりました、私はよく行つては、坊さんの意見を聞くやうにしてゐました。そして、いつも坊さんの意見では、私のやり方がよいといふのでした、坊さんの考へも、やつぱり子供は先づ五官を働かせるやうに注意せよといふのでありました、知識の源は、眼とか耳とか、さうした感覚にあるといふのでした。

然し、いくら子供に教へられると言つても、いつも子供の好き自由ばかりを許すわけにはいかん。子供はあぶないものでもつかまへようとする、さうした時に、親がそれを拒むは當然のことです、若し子供が泣くから、なんでも聞いてやるといふやうにしたなら、それこそ子供は我が

儘、強情な人間になつてしまふもとなんです、さういふ場合には、心で泣いても、斷然子供の願ひを拒絶してやらんといかん、子供は愛しても、決して甘やかしてはならん、欲しいものが與へられなければ、もとより子供は泣きます、さうした時には、何か外のを與へて、子供の心を轉じさせるやうにすることが大事です、私もコンラードに對して、いつもかうするやうにしましたのです。或る時、叔母さんがクリステルといふ小さい子を連れて、私の家に來ました、丁度、うちのコンラードも歩けるやうになつたので、同じ遊び仲間といふのでした、私はコンラードを椅子の上へ上げて遊ばせて居りましたので、今度はクリステルの方を椅子にのつけましたら、コンラードは、大變不機嫌でありました、これは小さいながらも、嫉妬の萌芽だと思つて、私はこれは小さいうちに矯正しなくてはならん、いろいろ工夫したことがあります。

或る時、私は馬を買ふと思つて、五六日田舎へ行つてゐたことがありました、歸つて來ると、コンラードは、私を見るなり、「とうちゃん！、とうちゃん！」と叫んだのであります。もうコンラードは生後一年半もたつてのことでありましたから、片ことまじりに、つひ言ひ覺えたものと見えます、その時の私の喜びは如何ばかりであつたらう。然し、私は坊さんの忠告もありまし

たので、それから、コンラードが、こんな片ことまじりの言葉を言つても、徒らに賞めちぎるやうなことをしませんでした、子供を過度に賞めることは、決して善い結果を生みませんから。また、コンラードが夜の食事が済んでも、なかなか寝つかないことなどがありました。かういふ時には、私は一ト苦心したものです、「お庭のとつとも夜は寝ますよ、わんわんも、にあいも、みんな寝るんですよ、だから坊もね！」などと、だんだん聲を低めるやうに言つて聞かせて、うとうとと眠らせるやうにしたものです。徒らに寝かさうと無理に促がしても駄目ですからね。

或る朝、私が着物を脱ぎ捨て、湯殿のところへ行くと、コンラードもそれを見てゐましたが、私も水を浴びようと言ひ出したことがありました、いかにもこれは口先きで教へるよりも實地の模範が大事だと言ふわけでせう。それから二歳の時、コンラードは麻疹にかゝつたことがありました、然し、どうしても薬をのまない、そこで、私は早速、ではお父さんがのまうと言つて、のんで見せたら、今度は自分からのむと言つて、のんだことがありました。なんでも親の手本が肝腎だと思ひました。

四 寛嚴宜しきを得よ

私は我が子には、決して厳しい打擲などを與へずに育てようと思ひましたが、どうもそれが出ない場合があります。といふのは、或る日、例の叔母のこのクリステルといふ子がやつて來ましたが、手に人形を持つて來たのです、そこで、うちのコンラードはその人形を借りて、喜んで遊んで居りましたが、クリステルが、いざ歸らうといふ時に、コンラードは、どうしてもその人形をおさへて返さなかつたのです。その時、私はなにか繪本でも持つて來て、コンラードに人形と取りかへさせたら善かつただらうが、さし當りさうした考へが浮んで來なかつたのです、そこで、私は頭から、コンラード、コンラード、早く人形をお返しと、言ひせがみました、ところが、コンラードは、いつかな聞きません、いや、いやと言ひ張るばかりでした。「でも、クリステルさんが、人形を持たんで歸るのは、可哀いさうじやないか？」

「でも、いやー！」
と言つて、人形をひしと抱いて、身をそむけました。そこで、私はむきになつて、

「コンラード！ お前、どうしてもクリステルさんの人形を返へさんといふのかえ？、それじゃ、お父さんが、お前の手から取つちまふぞ！」

と言つて、おどかしたら、コンラードは、いきなり、その人形をクリステルの足下に投げつけたのです。その時の私の驚きは如何ばかりでしたらう。クリステルは投げつけられた人形を、手づから拾ひ上げようとしたが、私はそれを止めて、コンラードに拾はせようとした、ところが、コンラードは、やつぱり、いや！ いや！ いや！ を繰り返すばかりで、一向聞き入れようとしなかつたのです。私は止むなく、杖を持つて来て、

「コンラード、さあ拾へ！ 拾はんと、これで打つぞ！」

と言ひましたが、コンラードは頭を振つて、

「いや！ いや！」

と拒んで聞きませんでした。

私は、自分の命令が聞き入れられないので、胸の中が、いらいらしてたまらん、早速びしやびしや打ちのめしたいと思ふ心がはやつた矢先きに、妻が来て、

「ね、あなた、どうぞ、それだけは！」

と言つて、私を遮りました、そこで、私は出鼻を折られた形で、やむなく、片手に杖と人形とを持ち、片手にコンラードを抱いて隣室にはいり、戸を閉めました、それから、人形を床の上に置いて言ひました、

「さあ、拾へ！ 拾はんと打つぞ！」

と脅かしたけれども、コンラードは依然として、いやだと言ひ張るのです。

「拾はんか？」

「いやだ！」

やつぱり聞き入れません、それで、私は容赦せず三四遍、杖で打ちました。そして、

「さあ、拾へ！」

と命じますと、今度はしかたなく、コンラードもふしやうふしやうに人形を拾ひ上げました。そこで、私は彼れを抱いて、また、もとの部屋へ戻り、

「さあ、お人形をクリステルさんにお上げ！」

と言ひました、彼れは、私の言葉のまゝに、それをクリスタルにやつたのです。

すると、コンラードは一時に胸が張り裂けたやうな気持ちで、母親の膝に頭をつつこんで、わあわあ泣き出しました。けれども、妻も私の心持ちを理解してゐたので、

「あつちへ行つてゐらつしやい！ お前のやうな意地わる子は！」

と言つて、かまひつけませんでした。それで、コンラードは取りつく島がないので、暫しが程は、ひとりで泣いて居りましたが、やがて泣き寝入つてしまひました。私はそれを見て可哀さうではあつたが、強情な心は、どうしても許すわけに行きませんでした。

然し、私の心は、どうしても落ちつきませんでしたから、かうした時には、いつも例の坊さんのところへ驅けて行くやうにしてゐました、それで、私は食事もせず、さつさと坊さんのところへやつて行き、一伍一什を話したら、

「それは間違ひはありません！」

と、鶴の一聲で、初めて私の心が落ちついたのであります。坊さんは更に、庭の雑草も早く刈り取らんと、あとには始末におへなくなる、早いうちに悪癖の根は枯らしてしまふやうにしなくて

はならん、打つときは思ひ切つて打て、なまなかの打ち方をやると、やがて、それを忘れて、またやり出す、また打つといふ風に、幾度も幾度も繰り返さなければならなくなる、しかも習ひ性となつて、却つて、其の効果が上がらぬ、打てば打つほど、効果がなくなつて、遂には、しかたのない子供になつてしまふ、今日のあなたのやり方は、誠に結構だ、命令を聞かぬ時は、どうしてもそれを聞かせるやうに躰けなくてはならん、そのお考へでやつてごらんさいと、いろいろ忠告をしてくれたのであります。私も、坊さんの忠告に従つて、躰けましたが、コンラードは實におとなしい子になりましたのです。

こんなに厳しく躰ける一方に、私は飽くまでもコンラードに對して寛大でありました、冬の寒い時には、もちろんコンラードの身體に氣をつけたのではありますが、然し寒い空氣に抵抗するだけに皮膚を丈夫にさせなければならんと思つて、機會だにあれば、戸外に出ては外氣に觸れさせるやうにしました、それから室内にはいつでも、決して蒲團にもぐらせるやうなことをせず、盛んに遊び戯れさせるやうにしました、子供を無聊にさせると、却つて悪徳を養ふことになりま

すから。或は繪本を與へたり、繪を畫かせたり、毬や木馬などを與へたりして遊ばせたのであり

ます。然し、コンラードは直ぐこんなものに飽きてしまいました、子供は長く一つ玩具に止まつてゐるものではないから、それで、代る代る玩具や、遊びごとを代へて、飽きさせないやうにするが肝腎だと思ひました。

冬も過ぎて暖かな春が來ました、私はよくコンラードを連れて戸外に出ました、見るもの聞くもの、一つとして小さいコンラードを喜ばせぬものはありません、たゞ、コンラードが石を拾つては昆虫に打つつけたりして、いぢめるのには私の心は、いつも惱まされました、それで、私はコンラードに向つて、お前も石で打たれたら痛いだらうと、言つて聞かせるやうにして、だんだん動物虐待の心をなくさせるやうに注意しました。それから、例の坊さんも、決して子供をこわがらせるものではないと言つて教へられたので、私は電でも雷でも、決してこわいものだとは教へ込みませんでした、それから夜でも、お化が出るなどと言つた例はありませんでした。或る日、春の野原を散歩して居ると、突然電光がひらめきました、すると、コンラードは、

「お父さん！ 火！ きれいな火！」

と言つて、少しもこわがるやうなことはありませんでした。

私はコンラードが四歳になるまでは、第一に事物に注意させること、第二に親の命令はよく聞くこと、第三に遊び仲間とは仲よくすること、第四に、飲み食ひは節制することの四個條に専ら注意して育てたのであります、一口に美德の習慣を造り上げるやうに注意したのであります。それから、坊さんの忠告に依つて、基督の心に従つて、子供に宗教教育の手ほどきを始めたり、また、新聞などを讀んでは、いろいろと知識の教育も授けるやうに仕むけて行きました。また、或る時、私は妻が私の言ふことを聞き入れないため、食卓に就くと、私の耐へてゐた憤怒の心が一時に勃發して、コンラードのゐる前で、盛んに妻を怒鳴りつけたことがありました、コンラードは、それを聞いてゐて、大變心配けな顔つきをしたのは言ふまでもありません、そして、お母さん、お母さんと言つて、叱られた母親を憐れむ情に堪へない風でありました、それを見て、私は眞に心から耻ぢないわけには行かなかつたのです、子供の前では、夫婦喧嘩は禁物だと、深く覺つたのであります。

五 コンラードの學校生活

コンラードはいよいよ五歳になりました。そこで、私は學校に上げなければならぬと思ひました。お隣りの子供は、もう字の読みかたを知つてゐるのに、うちのコンラードは、まだ大文字のイロハのイさへも知らないのです。そこで、私は早速、坊さんのところへやつて、學校へ上げたらどうだらうと尋ねました。すると、坊さんの答へには、いや、餘り早くから字などを覚えさせるのは、褒めたことではない、のみならず却つて害になる、子供はなるべく自然の事物に接させ、それを一々觀察するやうに仕向けることが第一だと言はれて、連れて行つたコンラードに向つて、いろいろ簡単な自然の事物に関する問答を試みられました。そして、その結果が大層よい、これならば學校にあける準備をしてもよからうと言ふことでありました。

そこで、準備をいたして、一年後には、坊さんのやつて居られる學校へ上げることにしました。ところが、坊さんの教授法といふのは、世間普通の學校のやり方とは違つて、先づ第一にいろいろな物を見せる、それから、その名を言はせ、それから字で書いて見せるといふ順序でありました。これが、どのくらゐ子供の勉強心をそゝつたか分かりませんが、コンラードは毎朝心勇んで學校に行くのであります。

ところで、坊さんの考へに依ると、教授法といふものは、子供に及ぼす結果が一番よいといふものを探らなければならぬ、それは實驗をして見ると分かるといふのであります。そこで、坊さんは、「イ」だの、「ロ」だの「ハ」だのと、いろんな字を書いた厚紙を切り取つて、「オ」と「ト」と「コ」といふ三枚の厚紙をつなぎ合せて、「男」と讀んで教へ、「オ」と「ン」と「ナ」とをつゞけて「女」と讀んで教へる、それから、だんだん進むと、「バ」と「ン」とをつゞけて、これは何ですかと聞いたり、「オ」と「カ」と「ネ」とをつゞけて、これは何ですかと聞いたりするのです。子供らは我れ劣らじと、讀んでは答へるのであります。コンラードの知識は、めきめきと進んで行きまして、書き方も、數へ方も、作文も、出来るやうになりました。

坊さんの教育は、訓練の上でも、子供の自發心に訴へるやうにすることを忘れませんでした。一々やかましく命令を下して、聞かせたり、させたりするといふ風ではなくて、子供が自分から進んで善事善行を爲すやうにと心かけたのであります。そして、私も、むろん坊さんのやり方通りに、家庭に於ても躰けて行つたのであります。

さて、コンラードも十歳になりました。偶々私たち夫婦が或る知人の結婚の仲介を依頼された

ので、私たちはコンラードを連れて行かず、弟、即ち、コンラードの叔父の家に留守中預けて行くことにしました。その間に、コンラードは大變な悪戯をやりました、叔父はその度毎にコンラードを叱りつけたり、或はたまらなくなつて笞で打つたりしたのです。いよいよ、結婚の用事も終つて、私たちが叔父のうちに來て見ると、叔父は早速、コンラードの起居動作について、私に訴へました、すると、コンラードは、そんなことは、みんな嘘と言つて否むのであります。そして、悪戯はしたにはしたが、向ふが悪いんだから、こつちもしてしまつたのだと言つて、なかなか承知しなかつたのであります。然し、私は歸宅後いろいろと教へ諭して、その悪戯を謝せることにしたのであります。その後も、コンラードは、よく學校のお友だちをいぢめたり、悪戯を加へたりするやうなことがあつて、その度毎に、私は心を苦しめたのです、それでも私は懇ろに餉くまでやさしく、彼れが心から、悔い改めるやうにと仕向けたのであります。

また、コンラードは、物のしまつが悪いのでした、それで、毎朝學校へ行く時になると、何が見えない、かが見えないと言つて、氣をもむのであります、それで、私はそんなことのないやうに、入れ箱を與へて、一切それに仕舞ふやうにさせました、それからは、一度も紛失するや

うなことがなかつたのです、坊さんも、それは名案だと言つて、褒めてくれました。小さい時から、しまつを善くさせることが肝腎であります。それから、私は貯蓄心を養はさうと思つて、毎月いくらかづ、の小遣ひ錢を與へることにしました、そして、その中から多少づゝでも貯蓄させるやうにしたのです。私も餘り貯蓄といふことばかり考へさせると、却つて守錢奴にしはしまいかと思つて坊さんに聞きましたら、そんな心配はない、然し貯蓄して、それを公共の爲めに散ずるやうに、絶えず心がけさせるやうにしさへすれば、安心だといふ話でありました。

六 梅の栽培

或る日のことでした、妻が料理をするために、梅の實を切つて居りました、そして、コンラードも、そのお手傳ひをして居りました、私は外から歸つて來て、それを見ると、早速、コンラードに向つて、

「いや、これは梅の實か？ それを植ゑれば、みんな立派な梅の木になるのだがな！ 二十年もたつとな！」

と言ひました、コンラードは、それを聞くと、

「じゃ、お父さん！ 僕一つ植ゑて見ませう！」

と言ひましたから、私は、それはよからう、一つやつて見ろ、そして、それが大きく育つたら、みんなコンラードのものにして上げると言ひました。ところが、植ゑる空地がなかつたので、コンラードと考へた揚句、お隣りの家の空地を借りることに相談しました、そして、いくばくの地代を拂ふことにして、いよいよ植ゑることに取りきめました。

ところが、その地代は誰れが拂ふかと言ひましたら、コンラードは、

「お父さん！ それは僕の貯金の中から拂へばいゝじゃありませんか？」

と言ひましたから、

「だけど、それじゃ一年分も續くまいじゃないか？」

と、私が答へました。そこで、コンラードは、お父さんが出して下さればいゝじゃないかと、重ねて言ひましたので、私は、一言の下に、それはいかんと止めました。といふのは、私は小さい時分から獨立自活の考へを吹き込んで置かうと思つたからです。それで、コンラードに向つて、

「ね、お前はお父さんの子だね！」

と、言つたら、彼れは、

「さうですとも！」

と強く返答しました。そこで、私は、

「お前は確かにお父さんの子だね！ それでは、お父さんがやつたやうに、お前はやらなくちやならんわけだね！」ところで、此のお父さんは、小さい時から、たゞで人から物をもらつたり、お金をもらつたりしたことはなかつたんだよ！ お父さんは、あの歳とつたクリステイーネが盲目であつたし、ハンス・ユールゲンは跛であつたし、お隣りのメルキオルンさんはトルガウの戦で右手を打たれて無くしてしまつたし、また、アンネ・グレーテ婆さんは、もうお婆さんになつて働らけなくなつたから、毎週いろんな物を上げてゐるんだよ！ ところが、お前には、お金や物を、たゞでやるわけには行かないじゃないか、お前は眼も、足も、手も、みんな達者だし、それに働らけない年頃でもないしさ、さうすりあ、どうして、お前に、たゞでやるわけに行くだらうか？」

「だつて、お父さん、僕はなんの仕事の役にも立たないんだもの！」と、うるんだ眼をして、コンラードは言ふのでありました。

「なに！ 仕事の役に立たんと？ では、お前、仕事をして見ようといふ気がないのかえ？」

「いえ、それあ、して見たいですが！」

「お前が、さういふ氣なら、一つ仕事をしてもらふことにしよう！」

「お父さん、それはどんな仕事？」

と、勇んで聞いたので、私は鶏の卵を集める仕事を、彼れに言ひつけ、その報酬として、毎週いくらかのお金をやることに、約束しました。それが一年たつと、いくら、二年目にはいくら、三年、四年たつと、いくらになるかなどと尋ねて見て、とにかく、自分の勤勞に對する報酬を以て、地代を拂ひ、梅の木の栽培をするやうに勧めました、そして、私は、

「ね、お前が働らいたお金で、自分が育て上げたら、お父さんから、一度にお金を貰つて、それで造つたよりも、幾層倍愉快だか分かりあしないよ！」

と言ひ加へました。

かうして、私は小さい時から、自分が働らいて、財産を造り上げるといふ習慣をつけさせようと考へたのであります、そして、その結果は、だんだんうまく行きました。私は、かうやつて、コンラードに向つて非常に貴重な五六の教訓を與へ得たやうに思ひます。第一には、自分の勤勞で生活するといふこと、第二には、お金の大事なこと、そして、そのお金を、きちんと始末して行くこと、第三には、正常な手段を以て、お金を儲けるといふこと、第四には、慈善救恤をすることに慣れるといふこと、第五には、年とつてから、親の脛をかぢるやうなことのないやうにすること、第六には、怠けたり、そそぐをした時には、いくらかつの罰金をとること、これでありました。

そこで、私は例の坊さんのところへ行つて、このことを物語つたら、坊さんはカールスベルヒといふ學者の言葉を引いて、大體こんなことを話して、私のやり方を裏書してくれたのです。それは、

「人間といふものは、當り前で成長して行くと、十八歳が二十歳で、十分に獨立自活することが出来るやうになるものです、その頃になれば、親だちは、子供のお蔭で安穩に餘生を送ることが

出来る筈である、ところが、世間の子供といふものは、これとは全く正反對に、大きくなると、却つて親の脛に噛りついてばかり居る、それでは、まるで野蠻人が親の死骸を食ふといふのと、何んの違ひもないわけじゃないか、而も、口を開けば、いつも我れは文明人だなどと言つて威張つてゐるのだが、こんなて、いたらくでは、とても威張れた話ではないじゃないか」といふ言葉でありました。

私のかうした教育の副産物として、いろんな美德を養成することが出来ましたが、例へば、梅の栽培からして、コンラードは他人の所有物や、所有地を重んずる習慣を養ふことになつたのは、その一つでありました。それから、萬事に對して細心の注意を加へ、器物などを、こわすやうなことがなくなつたなども、それでありました。

七 學者よりも百姓になれ

さて、コンラードは、なかなか學校の方も上出来であつたので、私は他日、學者にしようと思ひまして、或る時、妻に此のことを話したら、妻も大満足で、是非さうして下さい、私はそのた

めなら、どんな苦勞でもします、つまり、あの子の生ひ先きを考へると、大變な喜びですもの、それに、學者になつて、村に歸つて、みなさんの前でお説教でもするやうになつたら、どんなに親の喜び、家門の名譽でせうねと言つて、將來の希望に夢見るやうでありました。そこで、私は、それはさうとして、とにかく坊さんに御相談して見ようと言ひました、そして次の日曜に、私は坊さんのところへ行つて、私の考へを述べて見ました。すると、坊さんは、

「なるほど、親が子供の前途のことを考へて、一生の仕事を極めてやるといふことも、一概に悪いとは申されんが、何はさて置き、先づ第一番に子供の嗜好や、意向を察しなければならん、ついでには、コンラードさんが平生、何が一番好きなのですか？」

と言はれたので、私は、

「正直のことを申せば、百姓仕事ですね、馬を使つたり、木を植ゑたり、接木をしたり、挿木をしたりすることが、一番好きなのです」

「それでも、あなたは、學者にするおつもりですか？」

「はい、いやその、學者にでもすれば、親として、一家としての喜びでもあり、名譽でもあらう

と、考へまして……」

「いかにも、それはさうでせう！ ではあるが、立派な百姓になるといふことも、やつぱり同じやうに、親の喜び、一家の名譽とは思へませんか？」

これには、私は何んとも答へることが出来なかつたのです、といふのは、一體百姓になることが、一家の名譽だなどは、私には頭から思へなかつたからなのです。そこで、坊さんは、私の返事には構はず、言葉を續けられました、

「なるほど、學者になるのは喜びでもあり、名譽でもあるが、それが却つて、親の耻、一家の名譽になることもありますよ！」

と、益々以て、私には返答が出来なくなりました。そこで、坊さんは、つまり立派な學者になれば、名譽ともなるが、折角の大金を使つて、その上、奢侈遊惰を覺えて、所謂腐れ學問でもするやうになつたら、それこそ親の耻であり、一家の不名譽この上なしといふ結果になつて、世間に顔向けも出来なくなつてしまふ、それに、コンラードの嗜好が百姓仕事に向いてゐるとしたなら、いくら頭が善いと言つても、やはり立派に百姓になつた方が、どのぐらゐよろしいか分から

ぬじやないかといふ話でありました。

私は、坊さんのお話に、すっかり感心してしまひ、歸宅してから、妻にも、篤と話しをして、いよいよ、コンラードを學者にすることを斷念してしまひました、そして、坊さんの言葉に従つて、百姓として、一家の仕事を繼がせるやうに決心したのであります。

八 親への感謝狀

さて、その年の私の誕生のお祝ひ日でありました、私は自分の部屋にはいつて見ると、机の上に蜂蜜を一杯盛つたお皿がありました、そして、そのそばに、書狀が一通置かれてあるのを見つめました。そこで、私はやゝ不審に思つて、先づその手紙を取り上げて見ると、まさしくコンラードの筆なのであります。早速封を切つて讀んで見ますと、

お父さん、

今日はお父さんのお誕生日ですね！ お父さんが今年も相かはらず、お達者でゐらつしやることは、僕にとつて何より嬉しいことです、僕が生れてから、お父さんに海ほども、山ほど

も御恩を受けたことを、有りがたく御禮を申し上げます、ほんとうに、お父さんは善いお父さんです、世間の子供たちが、僕のやうに、みんな、こんな善いお父さんを持つたら、どんなに仕合せなことでせう！ 僕が、こんなに達者で、丈夫で居るやうになつたのは、お父さんが、僕を強くしよう、弱虫にはいかんと、日頃おしつけ下さつた、お蔭だと思ひます、お父さんは僕に動植物のことを、いろいろ教へて下さいました、それから、僕を坊さんの學校に上げて下さいました、そして、その學校で、もつと僕に物事を覚えさせるやうにして下さいました、それで、僕は野外に出て、いろんな物を見て、それが一々自分の知つてゐるものであると、僕はなんとも言へないほど、嬉しくてたまりません。お父さんはまた、僕に讀み書き算術を學ばせて下さいました、それに地理も、歴史も、宗教も。お父さんは、僕を、もう十三年も育て、下さいました、それに、お父さんは、僕にいろんな善い訓戒を與へ、また、いろんな善い事柄をお話しなすつて下さいましたので、僕は屹度善い人間になれると思ふと、全くお父さんのお蔭に外ならぬことを、深く感謝いたします、それからまた、お父さんが僕に栽培園や、蜜蜂の巢や、數頭の牝牛や、貯金箱のお金を下さつたことも感謝いたし

ます、お父さん！ 僕はお父さんのいろんな御恩に對して、お返しするやうなものを持ちません、せめて、此の蜜蜂の皿を、小さき贈り物として、お受け下さい。然し、僕はこれから一生懸命に働らいて、だんだん、お父さんをお喜ばせ申し上げる考へです、僕は出来るだけ、お父さんのお爲めになることを致します、その點は決して御心配ないやうに、願ひ申し上げます、そして、お父さんがお歳寄りになられて、もうお働らきになることが出来なくなりましたなら、僕がお父さんに代つて働らきます、お父さんは、ほんとうによく働らいて下さいます、僕がまだ小さいものですから、どうぞ、お父さん、御心配下さらずに、お歳をとつて下さい！

お父さんの子コンラードより

私は之れを讀んでゐるうちに、覺えず、兩の眼に涙が浮んでゐたのでした、私は早速、妻を呼んで、この手紙を見せました、妻もハンケチを濡らしては讀みつけました。そして、妻は、「ね、あなた！ 善い子を持つたものですわね！」

と、思ひ餘つた風情でした。そこで、私はコンラードを呼びました、

「コンラード、此の手紙は、お前が書いたのかえ？」

「はい、さうです！」

「お前が思ひついて書いたのかえ？」

「いえ、さうじゃありません、あの坊さんが書けとおつしやつたんですが……」

「あ、さうか、なにしろ、わしはお前の手紙を読んで、嬉しくてたまらんだ！ わしは立派な息子になつたら、お前は立派な男になつて、親孝行をしてくれるといふのだな！ わしは立派な息子の生ひ立ちを喜んで、永生きが出来るわけだ！ 『我が子に喜びを感じるものは、壽命を二つ持つたも同然』つて、バイブルに書いてあるんだがね！ よしよし、わしは、お前のために立派なお父さんとなつて、盡さうぞ！ それはお前、安心してな！」

これが、その瞬間に於ける、私だち父子の切なる眞情でありました。

さて、その後、妻の誕生日の祝ひが来ました、私は坊さんをお招待したらどうだと言つて、妻の同意を得たのです。その日になつて、坊さんがやつて来られましたので、私は早速、先日コンラードに勤めて手紙を書くやうにして下すつたお禮を申し述べました。ところが、坊さんが言は

れるには、

「いや、お禮のお言葉には、却つて、恐入ります、一體、私がコンラードさんに手紙を書くやうにお勤め申したのは、實はあなたのお喜びになるやうにと言ふよりは、コンラードさんに對して、親の有りがたさを深く思ひ込ませたいと考へたからですよ、一體、子供といふものは、毎日、親の御恩になつてゐても、つひその恩に慣れてしまつて、特別に感ずるといふ心が薄らいで行くものなんですよ、それで、一年の終りとか、親の誕生日とかいふ、好機會を選んでは、特に感恩の情を深からしめるといふことが、子供の教育上、誠に必要なことだと思ひます、それで、コンラードさんにお勤めして、あなたに手紙を書かせたわけなんです！」

妻の誕生日に、コンラードは、やはり妻に向つて、母親への感謝狀を書いたのでありました。
お母さん、

僕は、お母さんのお誕生日をお祝ひ申し上げます、そして、お母さんの御恩を有りがたく感謝いたしたいと思います、あゝ、思ひ出せば、お母さんは、僕のために、どんなに御世話下

すつたことでせう！ お母さんは、僕にお乳を頂かせて下さいました。お母さんが、しじゅう御丈夫でゐらしたので、僕はお母さんの結構なお乳を頂いて、こんなに達者に元気に生ひたつたのです、若しお母さんが御丈夫でゐられなかつたら、僕はこの間に達者に、元気にゐることが出来なかつたでせう！ 僕が、小さくて、やんちゃで、よく泣いたり、騒いだりするたびに、お母さんは幾晩もお休みなさらずに、僕を看護なすつて下さいました。僕が麻疹にかゝつた時に、お母さんは夜晝ぶつ通しに、僕のそばについてゐて下さいました。ね、お母さん！ どんなにお疲れなすつたでせう、餘處のお母さんだけが、やれ婚禮だとか、やれお祭りだと言つては、跳ねたり躍つたりしてゐるのに、お母さんはしよつちう、うちに居つては、僕の面倒を見て下さいました。お母さんは、僕を決して女中まかせにせず、御自分で、僕を、おんぶしたり、遊ばせて下さつたりなさいました。若し女中などにまかせて置いて、僕を落つことでもされたら、それこそ、僕は片輪にでもなつたことでせう！ ね、お母さん、お母さんが、僕に御親切を盡して下さつたことを、今から思ひ出すと、僕はありがたさに涙がこぼれてしまひます。でも、僕はお母さんに、少からず御心配をかけ申しました。も

う僕はそんなことは、いたしませんから、どうぞ今までのことは、お許し下さい、いやいや、お母さんの御恩は、まだ澤山あります。お母さんは僕に食事のことから、着物のことまで、一切萬端お世話下さいました。いつも、僕がきれいさつぱりした身なりをしてゐたのは、全くお母さんのお蔭だと思ひます。それでね、お母さん、僕は一生、決してお母さんの御恩を忘れません。お母さんのお爲めになるやうなことがありましたなら、必ず御満足の行くやうにいたします。お母さん、お部屋の窓ぎわに、僕が植ゑた櫻の植木鉢を二つ置いときました。どうぞ、それを御覧下さい、そして、しるしばかりの僕の志をお受け下さい！

お母さんの子コンラードより

これを見た妻の感激は改めて申すまでもありません。よく世間には、親の恩は有りがたいものだ、それだから孝行をしなくてはならんなどと、頭から子供に言ひ聞かせる親だちがあるが、それでは却つて、子供の反感を買ふやうになるものです。恩の押し賣りは、親としてつゝしまねばならぬことです。自然に子供の心に親はありがたいものだといふことを感じさせるやうに、仕向けることが肝腎です。近所の人だちは、お宅のコンラードさんは、どうしてあんなに親孝行でせ

うと、よく、私に言つたものでしたが、私はその都度、たゞ右のやうなことを話ただけでありました。

九 學校を終りて

コンラードも愈々めでたく學校を終りました、さきに坊さんの忠告もありましたこととて、私はコンラードの學校生活は、それ以上に続けさせることを思ひ止まりました。さて、學校を終へたことですから、私は學校でいろいろ御世話になつた先生に對して、改めてコンラードに感謝の意を表させようと思ひ、先生の御恩のありがたいこと、それは親の恩にも比らぶべきものだといふことを、話して聞かせました、コンラードは一々、自分も思つて居つたと見えて、私の言葉を篤と考へて居つたやうでした、それで、彼れは卒業の翌日、早速心をこめた感謝狀と、心ばかりの贈り物とを持參して、學校の先生を廻禮いたしました。

さて、コンラードがその廻禮を済まして歸宅してから、私は妻と二人あるところにコンラードを呼んで、今後の注意を與へました、コンラードは、これ又、至極同感で、これからは私に代つ

て家業を勵むから安心して下さいといふことでありました。日曜日に坊さんが宅に見えまして、コンラードの今後のことなどを尋ねられましたので、私は、自分の考へてゐることや、コンラードに話して聞かせたことを、一伍一什物語りしました、坊さんは、一々感心、感心と言つては、褒めて下さつたのです、そして、言はれるには、一體、若者には仕事をさせなければならん、小人閑居して不善を爲すといふ言葉のやうに、仕事がなく、毎日ぶらぶらしてゐると、必ず前途が悪くなり、一生を誤まつてしまふものだ、それで、コンラードにも家業に精を出させるやうにすることが、何より肝腎なことだといふことでありました。

それから、いくら家業を勵むと言つたところで、學問を廢してしまふと、これまた、却つて家業の方も駄目になつてしまふ、折角、今まで學んだ知識が、めちやくちやになつてしまひ、遂には村の無學な百姓と同じ仲間になつてしまふものだ、それでは今までの丹誠が水泡に歸する、それで、家業の暇には書物を読んで勉強しなければならん、仕事と學問とを平行させて行くやうにしなければ、他の人の上に立つ立派な人間とはなれんと言ふ話してありました。

尤も書物を読むと言つたところで、一定の選擇を加へずに、たゞ漫然と讀んでは、殆んど何ん

の役にも立たない、そこで、活きた知識を養ふやうな書物を吟味して、それを一心に熟讀しなければならん、世間では、たゞ書物さへ讀めば、それで善いものだと思つてゐるけれども、それは大變な心得ちがひである、書物は藥にもなるが、毒にもなるものだ、選擇を誤れば、それは有害なものになつてしまふ、そこで、善い本を選定して、その選定した本を熱心に讀みこなし、自分の血と爲し肉と爲すやうに心がけねばならん、就いては、その選定の御相談には是非とも預かりたいものだといふお話しでありました。そこで、坊さんのお話しでは、先づ精神修養の本、それから家業のために役に立つやうな本、次には見聞を廣めるための旅行記のやうなものが善いといふのでした、そして、理解力が進むにつれて、書物に書いてある事柄を、だんだん批評的に讀んで行くやうにしなければならん、悉く書を信ずるは書無きに如かずと言ふのでありました。そこで、私はコンラードに向つて、坊さんのお話し通りの通りを實行させるやうに仕向けました。彼れは家業のあい間や、休息時などには、一心に讀書をして、大變な興味と利益とを受けるやうになつたのです。

コンラードは、村の若者たちが日曜などには、よく酒場へ行つて飲んだくれて居つたのとは違つて、一日書齋に閉ぢこもつて一心不亂に讀書に耽けつて居つたのです、けれども、そのためか、どうも兎角、快活を缺き、社交を嫌ふといふ風が見えて來たのです、物事には、善い方面と悪い方面とが、つきまとつて離れないものと見えます、それで、私は、讀書は善いが、その爲めに沈んだり、人を嫌つたりするのは善くないと考へて、一日、坊さんに向つて何かうまい方法はなからうかと、相談を持ち込んだのです、すると、坊さんは、いかにも御心配の筋は尤もなことだが、さればと言つて、悪い遊び仲間を持たせてはならんと言ふわけで、いろいろ考へられた末、名案を授けて呉れました。

坊さんの案によると、村にも誰れそれといふ三人ばかりの感心な若者が居る、その若者と交際させたら善からう、それには會合の手段として、先づうちに球撞き場を設けることとする、そして日曜日毎に球撞きをやらせる、それを、きつかけとして書物を讀んで議論をし合ふ、それから、追々はその三人の若者と連れ立つて、小旅行をさせるといふやうにしたら、どうだらうといふのでした。そこで、私も、さすがに坊さんの名案を聞いて、手を拍つて賛成をした次第です、そして、早速その通りに實行しました、すると、効驗あらたかで、打ち沈んでゐたコンラードも

快活になり、人と話しをするのも好きになり、さばけて来て、なかなか立派な社交家となるやうになりました。讀書と社交と、これがコンラードにとつての何よりの修養でありました。

一〇 結婚するまで

コンラードは、學校を卒業してから、彼れこれ八年の間、かうやつて月日を送つて來ました、今や、彼れは一個の立派な男となつたのであります、私だち夫婦の喜びは、譬ひやうもありませんでした。

ところが、こゝ半年ばかり前から、コンラードが、隣り村のハイデレーベンの地主さんのうちへ、しげしげと足を運ぶやになつたのが、さては！と、私に思はれ出したのです、といふのは、その時に限つて、いつも獨りで行くからでした。そこで、或る日のこと、私は、コンラードに向つて、

「お前、なぜ、さう際々ハイデレーベンへ行くの？」

と尋ねて見たのです、すると、コンラードは、さりげなく、

「いや、牧畜の見習ひに行くんです、實は此の近村では、あの地主さんぐらゐる、牧畜のことを知つてゐる方がないもんですから、それに、お父さん、あの方は全く上品で、氣に入つた人なもんですから！」

と言ふのでした、そこで、私は、

「はゝ！」

と一口うなづいたが、どうも、そこに曰くがあるんだなといふことを感づいた、といふのは、牧畜にかけては、外に器用な人が澤山居るし、ハイデレーベンだけでも、何もその地主さんに限つたわけでないと思つたからです。そこで、私は、

「ふう！ 地主さんは善い人かえ？」

と、試みに一本參つて見たのです、したら、案の定、

「さうですとも、お父さん！」

「地主さんには、子供衆が幾人あつたけな？」

「五人です」

「さうかえー 長男は、いくつですか？」

「二十四歳です」

「それから一番上の娘さんは？」

「一番上のお嬢さんですか？ 一番上の？……」

「うん、その一番上のよ！」

「は、あの……あの……今年十八歳だと思ひます……」

と、言つて、コンラードは忽ち顔を赧らめ、もぢもぢするのでした。そして、私の顔をまともに
見ることもさへも耻かしさうでした。そこで、私は、

「いや、それでいいんだ！ おい、コンラード！ わしの顔を見んか？」

それでも、コンラードは、やつぱり顔を上げるに忍びなかつたのです。そこで、私は、

「コンラード！ お前、さう際々ハイデレーベンに行くのは、實のところ、牧畜見習ひのためじ
やないんだらう？ その一番上の娘のためじやないか？」

と、鋭鋒を、彼れの心に向けました。

「さうです、お父さん、實は……」

「お前、ほんとに、その子が好きなのか？」

「さうですとも……」

「なんといふ名前だつね？」

「マリーさんです！」

「え、マリーさん？ では、お前、その子はお前に親切なのかえ？」

「さうですとも、僕が行くと、なんでも持つて来て見せて呉れるんです、全く懐かしいんです！
……」

「うん、さうか、それなら結構だが！ でも、コンラード、お前とお父さんとの間は、全く友だ
ちのやうに親密だつたけな！、それで、お父さんの言ふことは、お前はよく聞く、お前の言ふこ
とは、お父さん及ばずながら聞いて来た開柄だつたけな！、それで、今後も永くさうやつてお五ひ
暮らししたいもんだと思ふ、ついては、そのマリーさんが、お前の言ふ通り、親切な、氣だての善
い子だしたら、結婚したら、善からうが、萬に一つ、さうでなかつたら、お前は、お父さんの

意志と忠告に反いてまでも、その子と結婚するつもりかえ？」

「いやお父さん、マリーさんは決して、そんな人ではありません、全く親切な、氣だての善い人なんです、嘘だと思ひなら、一度ごらんになつて下さい、必ずお父さんのお氣に入るだらうと思ひます！」

「さうだとも、一遍その子を見たいもんだが！」

「では、お父さん、次の日曜にお伴いたしたいんですが？」

「さあ、一つ考へて見よう！」

と、答へたが、私は態と日曜日を選ばずに、獨りで出かけました、一體、若い娘を見るには、前觸れをせず、あたり前に働らいてゐる様子を窺つた方がよいといふことを、私は聞かされて居つたからです。そこで、私はこつそり出掛けて行つて、地主さんの家に着きました、すると、年の頃十八歳ばかりの娘が、甲斐甲斐しく働いてゐるのが目につきました、私は頭のさきから足のさきまで、一々見とどけました、もちろん、その娘には氣づかれないやうに、垣根の外から、ぶりぶり見て居つたのです、身なりもきれいさつぱりしてゐる、それに顔と言ひ、身體と言ひ、

實に申分がありませんでした。そこで、私は門口に立ちまして、

「御免下さい、お父さんは御在宅ですか？」

と尋ねました、

「は、父でございますか？ 父は町へ出かけたのですが！」

「今日お歸りになりますか？」

「はい、戻つて参りますでございます！」

「では失禮ですが、お戻りになるまで、待たせて頂きたいですが、實はその、お宅で小馬をお賣りになるやうに伺つて参りましたんですが！」

「おや、それはまあ、あいにくと不在で、誠にお氣の毒さまでございます。」

と言つたきりで、別に私にお上がり下さいとも言はず、一寸お待ち下さいと言つて、奥へ走つて、お母さんと呼んで参りました。

いや、これが私に氣に入つたのです、一體、知らん人を上げと言ふやうな不注意な法はないからね、なかなか、その娘の用意深いことには、驚きましたよ。

そこへ、お母さんが現はれました、けれども私は態と姓名は名のみませんでした、気づかれるといかんと思つたからです、お母さんは、私を信用して厩舎に連れて行つて小馬を見せてくれました、それから、室に通され、娘さんの造つたパタを饗せられました、而かもそのパタの美味かつたこと！

お母さんが赤兒を抱いて居りましたが、何か用事があつたと見えて、マリーさんと呼んで、その赤兒を一寸抱いてゐておくれと手渡して、引き込んで行かれました。そこで、私は二度驚かされたのです、といふのは、いかにも赤兒をあやすことが親切で、而かも上手であつたからです、これは、てつきり子供育てがうまい、これならば、他日立派な母親になるに違ひないと、私は我天したのです。そこへ、お父さんが戻つて來られました、此の人とは豫ねて見知り合ひの仲でしたので、お父さんは、

「おや、これはキープルさんですか、暫らくでした、どうも留守にして失禮しました、ついでには、なにか御用事でも……」

との挨拶に、私は小馬の一件を持ち出しましたが、さあ、マリーさんは、「キープルさん」とい

ふ父親の言葉を聞いて、さと顔を赧らめ、下眼づかひになりましたのも無理はなかつたらう、そして、私の一言半句も聞き洩らすまいと、それとなく耳傾けてゐる様子でした。私は用事の方は、そこそこに片付けて、その家を辭しました。そして、近所で聞いたら、地主さんのうちの人だちを褒めないものはありませんでした、而かも、五人の子供のうちでも、マリーさんが一番善いといふ話でした。それで、私はコンラードの眼鏡の通り、此の子を彼れの妻に娶りたいものと決心しないわけには行きませんでした。

とにかく、話はとうとう芽出たく運んで、兩家の縁結びが首尾よく交はされました、コンラード、マリーの二人は世にも珍らしい好配偶でした、世間の中には、私のコンラードの教育法を嘲り笑つてゐるものもあつたが、いよいよ今日此の結婚を見て、初めて私の眞意が呑み込めた風でありました。

ロムフレッド・キープフェル

四三二

コンラード・キープフェル 終

蟻の小本

(教育者の教師)

一 青年教師ヘルマン君へ

吾が愛する若きヘルマン君よ、君は神聖なる教育事業にたづさはつて、ひそかに人生社會に貢献せんと決意されたことは、何と末頼もしき心掛けでありませう！。君は他の職業に對して、自から技倆も興味も無しとせられて、一意専心、教育の爲めに没頭せんと誓はれたことの、雄々しさよ！

こは確かに、人生社會の爲めに多大の貢献を爲すべき機会を、君に與へるであらうと信じます。凡そ世には物質的の福利を、人生社會に寄與する事業も少からずありますが、教育者の事業の如く、直接的な、徹底的な影響を持つたものは、一つとしてありません。と申すのは物質的の福利を與へるやうな事業は、單に人間の外部的境遇を改善するに過ぎないものでありますが、教育の事業は、實に人間そのものを改善し、向上せしめるものであるからであります。それで、若し人間そのものが改善し、向上したならば、人生の外部的境遇の如きは、自から改善されるであらうと思ひます。若し、君にして、一人の兒童を教育して、その改善、向上に成功したならば、彼れ

は成長の後、自己の天分に應じた職業に就いて、同胞の福利を増進するに至るであらうと信じます。

人間の一生を通じて、児童期ぐらゐる善に感應し易きものはありますまい、児童の心は尙ほ處女地の如く、そこに種子を下ろさば、忽ち根づき、忽ち發芽するものであります、また、それは蠟にも譬へられませう、吾々が意のままに、その形を變ずることが出来るからであります。之れに反して、大人の心は、もはや吾々の自由自在に操縦し、陶冶することが不可能となつて居るものであります、従つて、それを教育せんとしても、徒らに勞多くして殆んど效果なきが如きものであります。然るに児童の心は、右申す如く、全く吾々の自由自在に陶冶することが出来るものでありますから、若し、君が教育の術に通じ、聰明なる方法手段を用ひるならば、君が薫陶を受けたる児童は、やがて世に立つて、人生社會の福利に貢献するに至るべきことは、火を賭るよりも明らかであります。

世には教育の仕事が骨の折れるものであると言つて忌み嫌ふ人があります、もちろん、それは骨の折れる仕事には相違ありませんが、世間何の仕事か骨の折れないものがあらうかと反問したくなります、一體、教育といふものは、思つたほど困難なものではありません、たとひ骨が折れても、その骨折りに對して、優に報いて餘りある仕事であると確信します、無邪氣な快活な児童の中に入つて、仕事をして行くことは、教育者にとつて、幾多の喜びを與へるものであります、年若きものゝ間に伍して、青春の空氣に觸るゝものは、年と共に、自からも若やぐといふことは、ひとり私一人の経験のみではありませんまい。

或は教育者が社會より酬いられることの菲薄なることを訴へるものもありますが、私は、むしろ、教育者ぐらゐる多く酬いられるものは他にはなからうと思ひます、心常に快活であり、身體は壯健、元氣にて年をとることの出来るものは、ひとり教育者のみが有する特權であります、これが果して酬いられること少いなどと言ふべき筋のものでありませうか？ 尙ほまた、「教ふるは學ぶなり」(docendo discimus)の諺の如く、教育者は児童に知識を與へると同時に、自分からも知識を進めることが出来るのは、言ふまでもありません、道德上の方面に於ても、教育者は児童より却つて大に學ぶところがあるのであります。君若し、思ひをこゝに致さば、百の缺乏も何か憂へんやであります。

二 教育上の信條

私の教育的信條は頗る簡單であります、それは、

生徒に過失と惡徳とあらば、教師はそれらの原因を自己自身の中に求めなければならぬ、といふのである。

いかにも、こは餘りに嚴格過ぎた信條であつて、教育者を責むること餘りに酷に失しはせぬかと思ふ人もありませうが、篤と考へて見ると、決してさうではないといふことが分りませう。尤も私の考へでは、生徒の過失と惡徳とは、一から十まで皆な、實際に教師その人に責任があると云ふではありません、たゞ、教師自身が、その原因が自分にはないかと、靜かに反省して見るべきものだといふ意味に外ありません。そして、教師が若し、しか反省する力を持ち、そして、少しもひがみなく、さうすることが出来るやうにさへなれば、立派な教育者になるべき第一歩を看けたものであらうと信じます。とかく、人情の常として、責を他に嫁し、自分の非を掩はんとするものであります、それで教師とても人間である以上は、我が非を覺らずして、却つて

それを見童の責に歸せんとすることは、もちろん、特に咎むべき筋合ひのものではないかも知れないが、このやうなことは、理性の力を以て、押し鎮めなければならぬと思ひます。

若し、生徒が他の教師に對して従順であり、勤勉であるのに、君に對しては不従順であり、怠惰であるとしたならば、そこに、君自身が反省すべきものがありはすまいか。また、昨日は善く君の言ふことを聞いて、愉快に勉強したものが、今日は全くその態度を異にした場合、そこに、君自身の容貌、態度、氣分に、何等か生徒の不快を買ふに足るものがなからうか、これも反省すべきではありますまいか。更に、君が教へる生徒が、君に就かない以前から惡徳なものであつたとしたならば、君の責任がないわけではいかとの疑問も起きようが、然し、一旦、君がその生徒を教へることになつても、尙ほその惡徳が依然として止まないとするならば、それでも、君自身に責任がないと斷言することが出来ませうか？ また、君を初め總ての教師は、誰れ一人として、口に出して生徒に惡徳を教へようとするものはありませんまい、然し、それだけで、生徒の惡徳は教師に責任なしと言ひ張ることが出来ませうか、たとひ君が意識的には惡徳を教へずとするも、知らず識らずの間に、君の一言一行が、生徒をして惡徳に慣れさせるやうな結果を與へるも

のがないか、此の點を自から反省すべきではありませんまいか？ 諺にもあるやうに、模範實例は口先の訓戒よりも、深い印象を兒童に與へるものだからであります。

また、兒童の活動慾を抑えつけて、本と筆としか與へないならば、これまた、自然の與へた本性を拘束する結果、幾多の惡徳を醸し出す原因となることは、私の前著『蟹の小本』を読めば、自から明かなことであらうと考へます。尤も、私が教へ子の過失惡徳は、その原因教師に在りと言つても、それは決して、世の父母に向つて教師攻撃の口實を提供しようとするのではありません、私は父母もまた、教育者であり、教師であると考へて、世の親だちと學校の教師に向つて、かく忠言を呈した次第であります。何れにせよ、先づ己を知るは、知るの初めであります。此の一語を篤と吟味して頂きたいと思ひます。

三 教育とは何ぞや

凡そ人類始まつて以來、教育といふことが行はれたことは事實であります、さて然らば、教育とは何ぞやといふことになる、未だ以て一般の定説がないと申さねばなりません。教育を論

ずる學者は、何れも各自その持説を吐露して、區々一定せざる有様であります。私とても、出ることならば、アリストートル以來、ペスタロッチに至る諸家の教育觀を列擧し、解説し、比較し、批判することにしたとは思ひますが、然し、そんな煩勞を敢てしないのは、聊か私としては理由があります。第一に、私はそれらに就いては不案内であり、第二に、そんなことは私の趣意に反するからであります。各時代の教育觀を一々述べ立てたところで、仕方がないではありませんか、それよりも、私は卒直に、私自身の教育の定義を申上げませう、曰く、

教育とは兒童の持つた諸々の力を開發し、且つ練習せしむることである。

と、若し兒童を人にまで教育したならば、彼れの總ての力を開發し、且つ練習せしめたことにならざるであらませう、ところが、さうせずに、或る一定の職業者にまで教育したならば、單にそれに必要な方面の力が開發され、練習せしめられるに過ぎないので、それだけ片輪な教育となるわけであり、私の教育とは、決してこんな類ひのものではなくて、前者の人にまでの教育を指すものであります。

かの赤兒が歩行を學ぶ順序を、一々注意して觀察するならば、君はそこに、合理的な、そして、

人間の本性に適した教育の秘訣が潜んでゐることに氣づかれるでありませう。即ち、赤兒は初めは匍匐し、次に物に倚つて起ち、いく度か失敗を重ねた末に、漸く起つて二三歩歩き、それから、物に倚らず、巧みに歩行出来るやうになるのであります。此の自然的順序を篤と考察すべきです。即ち、教師は先づ兒童に適當な刺戟を與へ、兒童の學習慾を喚び起し、次に學習のいろいろな手段と助けとを供し、更に進んでは、その助力を取り去り、遂に兒童をして獨立獨行することを得るに至らしむべきものであります。子供が初め母胎内に在る時は、既に潛勢力を具備してゐるけれども、これは植物的のものであります。一旦生れ出ると、その力は初めて動物的のものとなつて發育します。そして、就中第一番に發育するものは、身體的の力であり、それから外界事物の刺戟に依つて、次第に精神的の力が發展して來るのであります。そこで、私は此の自然の順序に従つて、兒童の力を開發させるやうにするのが、即ち、教育の要諦であると信するのであります。

四 教育者は如何なる事を學ばねばならぬか

子供の教育はその誕生時より始めなければならぬといふことは、新たに子供の教育者たらんとする人にとつて、いかにも懐かしき言葉であらうと思ひます。私は、前著『コンラード・キープル』に於て、合理的な我が子の教育法を述べましたが、これは主として世の親たるものに提供したものであります。ところが、普通の教師は、大抵五六歳になつた子供を、初めて取扱ふものであります。そこで、私は此の年頃の子供を、如何に取扱ふべきかといふことを述べて、教師諸君の参考に供したいと思ひます。

扱て、第一に教師として知らなければならぬことは、兒童の身體のことです。そして、兒童の健康に注意し、それを増進することを心掛けねばなりません。不健康な兒童に逢つては、如何に教育を施しても失敗するものであります。少なくとも、さうした兒童の教育は、非常に骨の折れるもので、甚だ有りがたからぬことであります。それで、教育者は如何にすれば、兒童は健康を保つかといふことを、是非とも知らなければなりません。

かう言へば、人間の身體のことに就いては、世間に醫者といふものがあるではないかと言つて反駁する人がありませう、然し、兒童の場合に於て、醫者は常に兒童と共に起居するものであり

ませうか、児童の日常を少しも知らぬ醫者に、どうして身體上のことが的確に分かる筈がありませんか、そこで、私はどうしても教師が、児童の健康上のことを熟知し、且つ注意しなければならんと申すのであります。而かも、私の申す健康法は、外部の影響に能く抵抗することの出来るやうな、強壯な身體の鍛練法を指すのであります。然し、児童にかうした身體の鍛練をやらせるには、先づ以て教師自身も自己の體育を怠つてはなりません、身自から活きた模範を示して、児童を導くやうにしなければなりません。

扱て、體力を強壯にすると同時に、感受力や、記憶力や、想像力や、理解力の練習を計るやうにしなければなりません。そして、かうした力は外界の自然物に觸れさせて、練習させるやうにするのであります。そこで、事物の觀察といふことが、六歳乃至八歳の児童の教育上、全く必要なこととなるのであります。然らば、その事物はどんなものがよからうかといふに、それは却つて児童が、吾々に教へてくれるものであります、そして、私の長い間の經驗に據れば、動物が一番児童に親しいものであるやうに思はれます。むろん、さうした場合にも、私は第一に、その動物に就いて觀察するところを話して聞かせ、第二に、児童自からそれを觀察するやうに刺戟するの

であります、第一の場合は、私の力を働かせ、第二の場合は、児童の力を働かせることになりませんが、言ふまでもなく、児童の力を働かせることが主眼でありますから、つまり、私自身の力を働かせながら、それに依つて、児童の力を働かせるやうに促がすのであります。次に植物の觀察に於ても、また同じです、兎に角、感覺を働かせることが肝腎です、そして、觀察した事物は、動物でも、植物でも、または人工の事物でも、一々その特性を明らかにし、比較し、命名し、更に記述するやうに導くのであります。次には読み方の教授も、たゞ書物一點張りではいけません、一々實物について、教へるやうにしなければ、實感を伴はないで、効果が乏しいのであります。何れにせよ、児童は寸時もちつとしてゐないほど活動性に富んだものであります、それで、お静かになさいとか、ちつとしてゐなさいなどと、のべつに命ずるのは、児童の本性を無視した仕打ちと申さねばなりません。この活動性を利用するために、手工が必要であります。児童は自分で何かを製作することを好みます、そして、それを仕上げるのが、児童の非常な喜びとなるのであります。委しく言へば、第一に、児童の活動慾が満足されるし、第二に、眞に心から満足を表するし、第三に、それに依つて、多くの力が練習されることになるのであります。それであるか

ら、教師自身も自然觀察に長ずると同様に、手工の技術にも多少通ずるところがなければなりません。かの手工を爲させると、學科や書物の勉強を忘れてしまふとか、または、手工にはあぶない道具を使はねばならぬから、危険であるなどといふやうな一部の批難は、全く探るに足らぬものであると信じます。

最後に、教育の最も重要な部分と言ふべき道徳的習慣の養成、換言すれば、或る正しき規則に従つて行動するところの習慣は、如何にして養成すべきでありますか？ 若し、此の方面の教育を缺いたならば、他の方面に於て、如何に成功しても、駄目だと考へるのであります。徳育に缺けたものは、如何に知育に長じても、人生社會の爲めに却つて有害な結果を及ぼすものであります。そこで、従來は、此の徳育の手段として、徒らに禁止命令を發して、兒童を一定の型に鑄込まんとしたものでありますが、これは一體、兒童に限らず、人間の本性として、忌み嫌ふところであると同時に、私自身の經驗から割り出しても、無效有害な方法であります。兒童は命令禁止を強ひられると、却つて、反感と不平とを起すか、或は、追従と諂諛を事とするに至るものであります。そこで、私は、

兒童をして常に自由意志に従つて行動せしめよ、然らば、彼れは善良となるであらうと、断定しなければなりません。

此の言葉は、一見奇矯の感を與へるかも知れないが、篤と考へるならば、至極同感の儀と存じます。といふのは、教師は須らく兒童を指導して、自から進んで善を欲し、善を行はしめるやうにせよ、而かも他の命令に依つて善を爲すのでもなければ、褒美を欲して然か爲すのでもない、また、惡を爲さざるのも、他の處罰を恐るゝの餘りではなく、總てが、自己の自由意志に依つて行動するといふやうに仕向けるのが、私の本意であるからです。此の一點、君もさぞ御同感だらうと思ひます。ただ殘る問題は、兒童をして善を欲し、且つ善を爲さしむる方法如何といふ點であります。これは一見困難なやうで、その實、決して困難な問題ではありません、私の經驗に依れば、次の二方法が確かなやうです。

第一に、兒童に向つて常に眞實を語れ、即ち、兒童に向つて、義務に關して正しき觀念を懐かしめること。

第二に、兒童をして眞實の何たるかを洞察せしめるやうに導くこと。

また、児童の模倣性も、徳育上大に之れを利用すべきであります。若し、教師が児童の意になつた模範を示すならば、児童は遂には、自分の自由意志に依つて、善事を欲し、且つ實行するに至るものであります。次には、児童にも、直觀的に指示される事柄ならば、それを理解する力があります。それで、一旦、それを理解した以上は、教へずして、それに倣はんことを決心するに至るものであります。更に、徳育上、利用すべきは、児童の感覺性であります、それで、教師は言葉の調子と身振り手振りを、巧みに使用するやうにすべきだと思ひます。

私が、児童にその自由意志に依つて行動せよと説くに對して、或は世に、かやうな反對論が起るかも知れません、それは、人間は社會を組織する以上、その社會に生活するには、是非とも他の人の命令に從つて行動することを學ばなければならぬではないか、それで、若し各自が自己の自由意志を楯とするならば、社會生活は爲めに破壊され、今日見るやうな幾多の革命、國家の顛覆、主權者虐殺の如き秩序紊亂が頻々と醸し出される結果となるではないか、そして、これは今日児童青年に自由教育を與へる恐るべき結果に外ならぬではないかといふ批難であります。然しこれは全く見當ちがひの批難であります、杞憂もこゝに至つては、むしろ滑稽と言はねばなりません。

せん。苟くも思慮分別ある教育者は、児童に對して專制的態度を採らうとはしません、眞實の理由なき命令を、頭から押しつけるやうなことは、斷じて敢てしないのであります、たゞ、児童に向つて幾多の實例を提示して、社會生活を營む上には、服従の必要なこと、輿論に従ふべきこと、主權者の命令に服従すること、國家の安寧、社會の福利を増進すべきことを、合理的に納得せしめ、然る後に児童をして自から進んで、自發的にさうするやうに仕向けるものであります。かくして、遂には、現世に於ける人間社會のみではなく、神の世界の秩序をも理解し、神の命令に服従することの必要な所以をも覺らしめ、こゝに、宗教教育にまで進むことが出来るであらうと思ふのであります。

五 教育者教育に對する私案

何はともあれ、教育者を教育する爲めの師範學校を設立し、廣く世界第一流の教育家を招聘して、莫大の年俸を給し、また解剖學の大家を招聘して、常に死體を供給し、且つ青年教育者に人體の構造を教授せしめ、更に醫學の教師を招聘して、小兒病の講義を擔當せしめ、且つ、治療法

を教授せしめることとし、尙ほ圖書館を設けて、古今各國の群書を蒐集し、將來の教育者をして多方面の知識を得るに便せしむると同時に、獨逸のみならず、他の歐羅巴文明國の新聞を購入して、之れを閱覽室に於て閱讀せしめ、更にまた、出来ることならば劇場をも附設して、毎月幾回か演技せしめることとし、語調、手振り、態度等の表情術を練習せしめ、尙ほ言ひ得べくんば、植物園を附設して、世界諸地方の植物を蒐集することとしたならば、これ實に理想的なる教育者養成の大方案であらうと考へます。

私も今より四十年前、未だ青春の血潮に燃えてゐた頃には、かゝる計畫を立てたこともありませんが、今や、かゝる方案の實行が覺束なきことを覺るに至りました。といふのは、第一に、之れが實行に要する莫大の費用を醸出することが困難であると考へたし、第二に、よしその費用を得ても、此の案を實行するまでには幾多の年月を要し、現在の兒童をして、その恵に浴せしめることは覺束なからうと考へたし、また、第三には、假りに、かゝる條件が總て満たされ、國家が教育學の大家を、多數招聘することが出来るとしても、かゝる學者が果して兒童の實地教育に當つて堪能なりや否やは、私の頗る疑ひとする點であるといふ三個の理由に依つて、右の大方案

は、今日之れを言ふは易く、行ふは難き所以を覺るに至つたのであります。そこで、私は、こゝに改めて一の新案を提出して見たいと思ひます、それは、

教育者は自らを教育すべし

といふ語に盡きるのであります。然らば如何にして、教育者は自己を教育し得るか、

第一、健康であれ、第二、常に快活であれ、第三、兒童と共に語り共に散歩せよ、第四、兒童と共に遊戯せよ、第五、自然物に對して明確なる知識を得るに努めよ、第六、人工物に對して明確なる知識を得るに努めよ、第七、手先を使用することを學べ、第八、時間を利用する習慣をつけよ、第九、家庭と學校と協同して子供または生徒の健康を高度に増進せしめることを誇りとせよ、第十、指導の術を盡して以て兒童をして心から義務を自覺せしめるやうに仕向けよ、第十一、兒童をして行はしめんと欲することは已れも常に然か行ふべし。

六 結 語

どんな木を彫つてもマーキュリの神像が彫り出せるものとは限らぬといふ有名な諺の如く、ま

た、誰れでも畫家や詩人となれるものとは限らぬやうに、どんな人でも教育者となれるとは斷言し得られないと思ひます。それには自然の素質が具はらなければなりません。如何に學問があり、技能に秀でて、此の素質を缺いては、兒童を教育することが出来ません。それで、人は先づ自から自己を檢査して見なければなりません、そして、自己の素質を考へて、各自その適職に就くことを心掛けなければなりません。果して自分に教育者たる素質あらば、進んで教育者たるべし、若しその素質なくんば、斷じて教育者たるなかれ、却つて一生を誤まるの恐れがあります。若し神が汝に教育者たるの使命を賦與したりと覺らば、喜んで教育者として身を立てよ、そして、他の如何なる仕事をも顧みることなかれ！ これ私の最後の忠告であります。

蟻の小本終

本叢書の刊行について

文教書院 近 藤 彌 壽 太 識

凡そ教育の根本的價値は教育精神の發揚にあり、而して、教育精神の發揚は、古今大教育家の眞生命に關れ、その大理想に參するに如くはない。彼等が思索し、冥想し、感激し、體驗努力せる苦心の痕は、歴然として彼等の著作に儼存し、後進教育家に向つて永劫に光よ熱、血と涙を與ふるものである。

本叢書は、實に此等千古不磨の名著典籍を結集し、そこに貫流する教育精神の復現を期するものである。當院これが編纂の計畫をなすや年あり、乃ち、斯界最高の權威吉田博士の嚴正なる指導の下に、新進諸學士の獻身的努力を仰ぎ、こゝに、光彩ある本叢書は漸くその刊行を見るに至つた。

これ吾教育界多年の翹望に酬ふものであつて、これが完結は、たゞに當院の欣幸と光榮のみに止まらざるべきを信ずる。

大正十四年十月五日 印刷
大正十四年十月十日 發行

定價金參圓貳拾錢

新譯世界教育名著叢書
第十卷

著作者 田 制 佐 重

發行者 株式會社文教書院

代表者 近 藤 彌 壽 太

印刷者 關 根 慶 寬

印刷所 早稻田印刷株式會社

發行所

關西賣捌

東京市牛込區赤城元町
F 番東京四三三三番

大阪市西區阿波羅通四
丁目大阪四三番

株式會社 文教書院

株式會社 大阪寶文館

新 世界教育名著叢書發行の趣旨

近時續々として刊行せられる 文藝・哲學・科學・宗教等各種名著古典の叢書は、相競うてこれが完美を期するに至つたのであるが、ひとり教育の典籍たるべき叢書にあつては、未だ一つもこれが刊行の計畫を見ないものである。これ實に吾教育界の一大缺陷であり、又大恥辱であると稱すべきではなからうか。

それ教育の根本活機は教育精神の發揚に待たねばならぬ。而して教育精神の發揚は、古今大教育家の眞生命に觸れ、その大理想に參するに如くはない。彼等が思索し、冥想し、感激し、體驗努力せる苦心の痕は、歴然として彼等の著作に儼存し、我等後進の教育者に向つて永劫に光と熱、血と涙を與ふるものである。

本叢書は實に此等千古不磨の名著古典を結集し、そこに貫流する教育精神の復現を期するものである。正にこれ、教育界多年の翹望に副ふものであり、教育家必讀の寶典であつて、必ずや斯界に甚大の貢獻を齎すべきを信じて疑はない。

編輯顧問

文學博士 吉田 熊次

編輯總任

濱田 廣介

時野谷 貞

留岡 清男

小川 實也

香原 一勢

田制 佐重

清水 忠治

新 世界教育名著叢書卷別及其内容一斑

第一卷 哲學と教育 社會 ナトルブ デューイ

田制佐重譯

獨のナトルブと米のデューイは現代世界教育思想界の二大覇者として洽ねく認められる所である。一は新カント派理想主義に立ち、他はブラダマチズムの實驗理想主義に據るの差はあれど、同じく教育の社會化を論じ、自由教育を主張し、威風堂々天下の教育思潮を指導するの概がある。而して本卷に收めたる二書は各其の代表的雄篇として、苟も現代最高最深の教育哲學に思を潜める者の必讀を要する所であらう。

第二卷

ゲルトロッドは如何に其の子を教ふるか
リーンハルトとゲルトロッド(醉人の妻)
隱者 夕暮

田制佐重譯

「ゲルトロッドは如何に其の子を教ふるか」は吾がベスタロッチ五十五歳の作にかゝる。即ち其の友ダスナーに宛てたる十四通の書信は、實に彼が半生の苦心の跡を具に物語るもの、血と涙なくしては通讀し得られないものである。尙ほ本卷には有名な「リーンハルトとゲルトロッド(醉人の妻)」及び「隱者の夕暮」等、彼の著書の精髓を収録し、優にベスタロッチ全集の名に耻ぢざらんことを期したものである。

第三卷 理想國の教育學
カントの哲學

プラトーン 田制佐重譯
カント 香原一勢述
留岡清男譯

哲學者は帝王たるべく、帝王は哲學者たるべしとは實にプラトーンの高遠なる理想ではないか。而して彼の『理想國』の一篇は、正に此の哲學者兼帝王たる者の教育の理想と方法とを描寫せる壯嚴無比の大傑作である。又カントは近世に於けるプラトーンの復活と稱せられ、其の高邁卓抜の哲學體系は、眞に古今獨歩の名に反かぬ。哲學の學徒たる者、誰か此の二大學聖を逸すべきぞ。本卷又カントの『教育學講義』を附した。

第四卷 トルストイ童話集
トルストイ 濱田廣介譯

露國の生める偉大なる文豪トルストイは、兒童の熱愛者將た自由教育者として亦偉大であつた。夙に青年時代鄉村に私塾を開き、純眞無垢なる農民の子女を教育し、又教科書として自ら幾十篇の宗教物語及び童話を著し、専ら愛と信仰の心を培はんとした。本卷は約廿篇を網羅せるトルストイ童話全集である。

第五卷 教育學說選集

アリストートル コメニウス
クインチリアン ロバツク
エリオット ヘルバルト
ヨラ スペンサー

田制佐重譯

古今の大教育學者の學說を今少し委しく知りたといふ事は、教育史を讀む何人もが痛感する所であらう。僅々數行乃至數十行の記述では、到底彼等の思想の輪廓をだも知り難い。本卷はアリストートル、クインチリアンを初め、エリオット、ロヨラ、コメニウス、ロツク等は勿論、ヘルバルト、スペンサー等に及び、一々原文に據り學說の要點を系統的に傳へてゐる。

第六卷 エミール
ルソー 田制佐重譯

ルソーの『エミール』は確に現代教育思想界に對して、絶大なる衝撃を投じたものである。大哲カントも此の書を読んだ時ばかりは、其の几帳面な日課を失念し、ベスタロッチも恍惚として我を忘れて讀みふけつたと傳へられる。而して擔當譯者の流麗暢達なる筆致は、恰も之を一篇の創作と化せしむるの概がある。

第七卷

クオレ (愛の學童日記) デ・アミチス 小川實也譯
トム・ブラウンの學校時代 ヒウズ 時野谷貞譯

「クオレ」譯して『まごころ』といふ。伊太利の作家デ・アミチスの最大傑作として既に世界的讀物と認められ、我邦にも『愛の學校』として紹介され、今尙ほ中學生の英語教科書となつてゐる。可憐なる伊太利少年の生活記録、將た又伊太利の小國民魂を如實に活寫せる名篇である。本卷には是れ又有名なる英のヒウズの世界的名著『トム・ブラウンの學校時代』を收め、英國少年の紳士的教育の一斑を傳へてゐる。

第八卷

人間の教育 フレーベル 田制佐重譯
幼稚園の教育 ナリヒター

教育殊に幼稚園教育に於てフレーベルの名ほど親みあるものはなからう。彼は人間の内心には神性宿るとなし、之を發揚し、開展せしむるが教育なりとの根本思想より、特に幼兒を生々發育すべき草木に譬へ、教師を園丁になぞらへ、早くより純真な人間の神性を培はねばならぬと説いた。本卷には彼の代表的著述たる『人間の教育』を主とし、同じく彼の『幼稚園の教育』を紹介し、更に『エミール』と比肩すべき『レヴアーナ』をも紹介してゐる。

第九卷 世界童話選集

アラビアン ナイト アンデルセン
ドビン ホーテ ガリヴァー
ラダブルソン クルソー
ソログロフ ハウエル
演田廣介譯

兒童の心靈の糧として、知識感情の芽生えに培ふものはお伽噺に如くはなからう。如何ほど讀みふるされても盡きせぬ興味は愈々深く湧き來る。お伽噺の絶大なる教育的感化力は實に此處に見出される。本卷には上掲の如く、童話界のクラシックス及び歐米に於ける現代童話の名篇數種を抜き、一卷の中に世界古今の童話を網羅し、自在の筆を駕して、家庭及び教壇に於けるお話の好資料に供しようと思ふ。

第十卷

蟹の小小本 (我子の惡徳) ザルツマン 田制佐重譯
蟻の小小本 (教育者の教師) ザルツマン
コンラード・キーフエル (我子の美德) エレン・ケイ

汎愛派の教育家、諷刺作家として、ザルツマンの名を知らざる者はあるまい。『蟹の小小本』題名既に奇抜、嘗て故大村仁太郎氏之を抄譯して『我子の惡徳』を公にし、嘖々たる好評を博した。本卷は新に原書を全譯し、附するにザルツマンの『蟻の小小本』(教育者の教師)及びコンラード・キーフエル(我子の美德)を以てした。尙ほ兒童愛の急先鋒エレン・ケイ女史の『兒童の世紀』を譯載した。

第十一卷 文藝家教育論集

ゲルテ ラスキ
ニルテ エマ
カール ヌ ア
田制 佐重述 トル
トイ

文藝教育は當今教育界の警語である。如何に現代人は解放されたる人間性に憧れ
るであらうか。完き教育は人間性の解放を標的となす點に於て、文藝の精神と一脈相
通するものがある。是れ實に古今の文豪が期せずして教育を説ける所以である。本
卷は彼等文豪の戯曲、論文等を博く涉獵して、極めて情懷に富める彼等の教育觀を
集成せるもの。時節柄最も趣味多き讀物たるを失はぬであらう。

第十二卷 現代教育學說選集

ローゼンクランツ ナトル
リット スブランツ ガ
デューイ モンテッソリ
オーシー バーカー スト
其他 吉田 熊次 述

本卷は親しく顧問吉田文學博士の執筆にかゝり、第五卷の『教育學說選集』が、専
ら教育史上に於ける古典の選集であるに對して、主に今日の學界に活躍せる獨米其の
他の代表的教育學者の主要なる著述を基として、其の學說を叙述批判したるもの、博
士苦心の作として本叢書の光彩を添ふることは、讀者と共に大に期待すべきところで
ある。

終

